

太田俊雄の宗教教育思想（5）

山 田 耕 太

1. はじめに

冒頭で、前稿までの「太田俊雄の宗教教育思想」を簡潔に要約したい。第一に、太田俊雄がアメリカ・シカゴ郊外のノースセントラル大学（North Central College）とエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校（Evangelical Theological Seminary）での留学時代（1949-1952年）に学んだ宗教教育、とりわけホーレス・ブッシュネルとランドルフ・C. ミラーの宗教教育思想の核心とクリークらの「無意図的教育」を明らかにした。⁽¹⁾ 第二に、太田俊雄の英語教師時代（1935-1949年）に遡って、太田俊雄に多大な影響を与えた小原国芳、羽仁もと子、河井道の宗教教育思想と実践の要点を明らかにし、それらを大正リベラリズムの系譜に位置づけた。⁽²⁾ 第三に、太田俊雄が英語教師となる以前の旧制中学時代（1925-1931年）に私立岡山巖で出会い決定的な影響を受けた柴田俊太郎と柴田に多大な影響を与えた本間俊平の宗教教育の実践を解明した。⁽³⁾ 第四に、太田俊雄がキリスト教の受洗以前の精神的基盤の一つとして、太田俊雄に多大な影響を与えた私立中学岡山巖時代の藤井豁爾校長のユニークな教育実践に光をあて、岡山巖の教育実践の背後にある中江藤樹と熊沢蕃山に遡る岡山藩学校と閑谷学校の教育理念、すなわち陽明学が太田俊雄の「心の教育」の一つの根にあることを明らかにした。⁽⁴⁾ 本稿では、太田俊雄の宗教教育思想がキリスト教に「継ぎ木」される以前の「野生のオリーブの木」（ローマ書11:24）のもう一つの根である父母の宗教について光をあててみたい。

2. 教育の原点：父と母の影響

太田俊雄は自分の人格形成に最も影響を与えたのは、旧制中学の英語教師であった柴田俊太郎や藤井豁爾校長ではなく、両親であることを告白している。⁽⁵⁾ また、このような経験に基づいて一般論として次のようにも記している。

「わたしはひとりの人間の人格形成に最も大きな影響を与えるのは、その親であると信じて疑わない。親こそ最大の教育者である。」⁽⁶⁾

太田俊雄はしばしば教育講演で取り上げたテーマではあるが、一つのエッセイの中で「人間のなし得る最大の事業」は「子供の教育」であり、「その中心は心を育てること、心を養うことである」と端的に指摘している。また、「父親と母親が一致協力してこの大事業にあたらなければならない」が、その中でも「子供の教育（人格形成）の担い手は母

親であり、この世で最大の教育者は母親であるという、自覚と責任感、これが教育の原点であり、人格形成はここからスタートする」とも述べている。⁽⁷⁾

このような言葉の背後には太田俊雄自身の父・傳五郎と母・加津による教育経験があった。⁽⁸⁾ 俊雄は傳五郎と加津の四男三女の長男として1911年9月11日に、岡山県御津郡伊島村（現、岡山市北区）万成（まんなり）で生まれた。⁽⁹⁾ 俊雄が生まれて数年して岡山県都窪郡菅生村（すごうむら、現、倉敷市）三田（みつだ）に転居した。傳五郎も加津も貧しい中で多くの子供を抱えていたが、それに加えて石切り場の親方をしている父親の元には「たいてい数人の弟子が住み込んでいた」。⁽¹⁰⁾ 俊雄は「10歳まで生きられたら拾いもの」⁽¹¹⁾ と言われるほど体が弱く、このような貧しさの中で、中学で英語教師の柴田俊太郎と出会うまでは「劣等感の中で、ひがみかかった」⁽¹²⁾ 子供として成長していった。

3. 母・加津の信心

太田俊雄がヨチヨチ歩きを始めた1歳7か月頃に、急に青菜に塩のようにグツタリとなってしまった。母親の加津は岡山一の名医と言われた小児科医に見せたところ「奥さん、これはもう手遅れです」と言われ、入院を懇願しても「どうにも手の施しようがありません。あきらめなさい」の一点張りで断られた。しかし、「名医がサジを投げて母はサジを投げるか」「名医が見捨てても見捨てるものか」と強がりと言いつつも、途方に暮れていると、思いがけずに十数年ぶりに幼な友達に出会った。事情を話すと、彼女は母子を鍼灸院にまで連れて行って鍼灸師に紹介し、そこでお灸を据えてもらった。帰宅の途中で、俊雄が次第に息を吹きかえすように元気になっていく姿を見て、母は半信半疑の気持になった。この奇蹟的な経験を通して「岡山の名医はサジを投げ見捨てられたが、神様は見捨てることがなかった」「神さまに助けられた」という確信を抱く。「あんたが奇蹟だと言われるように助けられたのは、神様がかならずあんたに何かをさせようとおられるからだよ。それを忘れるんじゃないよ。その神様の御用とは何か、それを探し求めて、それを立派にやりとげるんだよ。それがあんたの人生の宿題だよ」と幼い俊雄に何度となく語り聞かせた。⁽¹³⁾

俊雄は幼い頃から危機に直面すると母から「お母さんの神さまはなァ、生きておられるんじゃない。そしてなァ、恐れんでもよい。わたしがついておる、と言われるんじゃない」と聞かされてきた。「われわれが身を正し、心を静めて待っていれば、われわれに近づき、われわれに語りかけ、われわれを慰め、励まして下さるお方」⁽¹⁴⁾ という「生き神さま」であった。戦時中に徴兵検査に甲種合格して入営した後、二週間も経たずに徴兵検査の手落ちで乱視であることを見落としたことに後で気づき、それを理由に「タマよけには惜しい。…中隊長の一存で兵役を免除する。銃後であって良き奉公をせよ」という上官の命令で除隊

し帰宅した。すると、母は「ああ、たとい千万人がバタバタ倒れるようなことがあっても、あの子はわたしが必ず守ってやる、と神さまが仰ったのは、こういうことじゃなかったのか」と神の約束が実現したことに感謝した。そして「お国のためにタマよけになるのが、神さまから与えられた人生の宿題ではなかったのじゃな。神さまの宿題はもっと他のことじゃ。それを立派にしとげんさいよ」と俊雄に言い聞かせた。⁽¹⁵⁾ こうして俊雄は、柴田俊太郎のような英語教師になろうと、苦学して教員になる道を選んだのであった。

俊雄が中傷や非難に打ちひしがれた時に、母は「人さまの思惑をいちいち気にしておいたら生きていけん。気にせんことじゃ。神さまがほんとうのことはご存じじゃ」と慰める一方で、「人さまの目はごま化すことができて、神さまはそうはいかん。神さまのおさばきはきびしさからな。アダやおろそかな気持ちで生きてはならんぞ」とも厳しく諭した。

後年になって、「無学で平凡な女性」であった母が人間形成という教育の大役を果たしてくれたことを太田俊雄は大きな希望であったと述懐する。⁽¹⁶⁾ また、母親に何を一番感謝するかという質問に対して、「心に一番ひらめいたのは、子どもに対する信頼であり、期待であった。その信頼と期待にこたえよう、という思いで、わたしは青少年時代をすごしたことを、最高のしあわせと思う」と答えている。⁽¹⁷⁾

4. 父・傳五郎の「学問」

父親の傳五郎は、厳しく激しい人であった。「その激しさは外には表れず、内面に燃えたぎっていた。」村人たちは「仏さま」と呼んでいた。⁽¹⁸⁾ 俊雄は村人たちから「仏さま」という異名をもらうほどの正直で勤勉な父を尊敬する反面、「秀才」と自認していた自分を上級学校に上げようとは思っていない頑固者の父に対しては反感と憎しみをもっていた。⁽¹⁹⁾

俊雄が小学5年の時である。朝から倉敷に出かけていた父が、夕暮れに自転車に乗って帰ってくるなり俊雄を呼び出して、ジョレンとスコップを持ってくるように言いつけ、田んぼ道を倉敷の方に歩いて行くので、俊雄も父に従った。小川の橋の近くに来ると「これ、見い」と道に大きな穴が開いているところを指して言った。「日が暮れてしもうてから、人さまが通りかかって、この穴に落ちたら大事になる。これはいかん。修理させていだけごう、そう考えながら帰ったんじゃ。」「考えてみれば、お前ももう数え年で13になったのじゃなア。13といえば、そろそろ人生のほんとうの学問をしてもよい年頃じゃ。そう思うたから連れてきた。」こう言って、二人で穴を埋めた。「人さまはどなたも見てはおられん。だごのう、神さまは見ておられる。お前がこれから大きくなって、どこに行って、何をできるようになるか知らんが、どこに行って何をしようと、神さまは見ておられるからな。それだけは忘れるんじやないぞ。人はごま化せても、神さまはごま化すことはできん」と父は子を諭した。

小学6年の秋頃に俊雄は両親の激しい口論を聞いてしまった。勉強好きで成績の良い俊雄をせめて中学校だけは卒業させたいと言う母に対して、父は真っ向から反対した。「学校に上げて、あの子の心を養って下さる先生がどこにおるか。そんな立派な先生がどこかにおられるなら教えてくれ。あの子はわしが教育する。わしが立派な人間に仕上げさせてみる」。(20) また、別の日に父は息子に言った。「俊雄、学校へ行くことなんかあきらめんさい。なまじっか学校なんか行っても、人間にはなれん。お父さんが人間にしてあげるから、お父さんといっしょに石を割ろう。お父さんはのう、あんたにほんとうの人間になってもらいたいんじゃ。肩書や地位や財産で物を言うたりするのではなく、素っ裸になって物を言えるような人間になってほしいんじゃ」。(21) 担任の先生は俊雄が中学に行くことを勧めるために何度も家に足を運んだ。担任の先生は1年経って今度は校長先生を連れて頑固な父を説得するために何度もやって来た。「そんなにお困りなら、授業料なら私たち二人が責任をもって払ってあげますから」という言葉にやっと折れて中学進学を認めたのであった。(22)

中学で出会った柴田俊太郎は俊雄を励ますために、10数キロの道のりを自転車でやって来て、俊雄と共に石切り場で終日トロッコを押したことも何回かあった。「君のお父さんは、本間俊平先生みたいなお人じゃなア。あのお父さんは、もし学問をしておられたらドエライ人物になられたろうぜ」と柴田は俊雄によく語った。(23)

俊雄が「東京で死んだつもりで、…無我夢中で生き」(24) 法政大学夜間部に入って勉強していた頃のことである。久しぶりに家に帰ると仕事着に着替えて父と共に石切り山に登り、久しぶりに鉄製の鎚（セットウ）を握って花崗岩の岩肌に向かってハンマーを打ち、額に汗が流れてへとへとになるまで石切り場で働いた。父は子に語りかけた。「俊さん、あんたは東京に行ったが、ダメになっとらんわ。頼まれんでも山に来て、あれだけ働けりゃアたいしたもんじゃ。だいぶ人間ができてきたようじゃなア。やっぱり父さんの子じゃわ。ハッハッハッ」「近頃の若い者は、学問すると働くのをいやがるようになるようじゃ。東京になぞ行ったら、帰って来ても百姓の手伝いなぞせんようになるそうな。百姓の子が“こえたご”をかつぐのを恥ずかしがったり、しまいには“こえたご”をかつぐ親を恥ずかしがったりバカにしたりするようになる。そういうて百姓の親ごさんが嘆いておられる」「それが学問というものか。もしもそれが学問なら、どこか狂うとるわい。なア、俊さん」。俊雄は父の言葉に多少の戸惑いも覚えたが、家に戻ってきてよかったと思った。(25)

俊雄は尋常小学校高等科の1年間と旧制中学校の5年間の併せて6年間、毎日学校から帰ると夕刻まで、日曜・休日・休暇中は朝から夕まで、石切り場で岩にノミと槌を打ち、トロッコを押し、鍛冶場でフイゴを吹き、ノミに焼きを入れる仕事の手伝いをした。後年

になって、「弱虫で泣き虫だったわたしは、こうしてあの石切場で“人間”となるために必要な、人格的脊椎をつくってもらった」と述懐する。⁽²⁶⁾

5. 父と母の宗教

太田俊雄の父は「お天道さまは見ておられる」と口ぐせのように言い、「神さまは生きておられるからなァ。人はごまかせても、神さまはごまかされんぞ。人さまの評判やおもわくで行動を左右するような安っぽい人間にはなるな。畏れるべきは神さまだけじゃ」と折に触れて語った。⁽²⁷⁾ 母も1歳半で小児科の名医に「手おくれで、もう手のほどこしようがない」と宣告されたにも関わらず、全く思いがけない人に会いお灸で助けられ、「神さまがついていて下さらなかったら、どうしてあんなにして助けられるもんか」という言葉を俊雄に何十回と口ぐせのように語った。⁽²⁸⁾ 両親は金光教の篤い信者であった。⁽²⁹⁾

金光教は、岡山で黒住宗忠（1780-1850年）が始めた黒住教、奈良・天理で中山みき（1798-1887年）が始めた天理教などと並んで、幕末維新期に成立した代表的な民衆宗教であり、神道十三派の一つに数えられる。⁽³⁰⁾ それは「生き神」信仰を特徴とする。金光教を始めた金光大神（こんこうだいじん1814-1883年、戸籍名。旧姓：香取文治郎、養子名：川出文治郎、家督相続後は赤沢文治）は、岡山県浅口郡大谷村（現、浅口市金光町）⁽³¹⁾の農民であった。23歳で養父の家を継ぎ、妻を迎えて、家産回復のために勤勉に働いて徐々に田畑を増やし、神仏を深く信仰していた。家を継いで20年程して資産を回復したが、その前から三人の幼児が次々と亡くなり、二人の子も病にかかり、二頭の飼い牛が病死するという不幸が始まった。金光大神自身も42歳の厄年に喉の病気で重体となったが、厄祓いの中で初めて「金神」（こんじん）の神と出会う経験をして全治した。その二年後には実弟の神がかりを契機として、神の言葉を感得し、神の言葉が自ずと口に出るようになり、1859年に46歳で金光大神は治病や農業、その他農民の様々な悩みについて、人間の言葉を神に伝え神の言葉を人間に伝える「取次」を始めるようになった（立教神伝）。こうして金光大神は自宅の六畳を「広前」（神殿）として人々に対して祈念と布教の生活に入り、睡眠と食事以外はほとんど神前を離れずに民衆の訴えに耳を傾けて「取次」をした。それは1883年に70歳で亡くなるまで続いた。金光教は岡山県や広島県の農民や民衆の間に広まり、さらに大阪・東京にも教団の拠点を広げ、その後は病氣治し・家庭円満・商売繁盛の現世利益的な宗教として日本各地に広まっていった。

金光大神は、幼い頃から病弱であったが、川手家に12歳で養子に入り、その翌年の1年間だけ大谷村の庄屋の小野光右衛門について手習いとして習字と「実語教・童子教」⁽³²⁾を習った。当時の農民として学問とは無縁であった金光大神にとって、小野は唯一の師であった。青年期には次第に健康な体となり、畑仕事に精を出すようになっていき、16歳

の頃に小野の長男らと6人で伊勢参りをし、33歳の厄年の時に5人の仲間と幕末の50代半ばの時には老人たちと四国遍路の旅に出かけた。その外は、生涯を通してほとんど村を出ることはなかった。

6. 金光教の「生き神」

当時の岡山県の農村地帯では、「陰陽道」や「修験道」に由来する迷信、すなわち家相・方位・日柄、金神崇りなどに日常生活は多大な影響を受けていた。陰陽道系の崇りの神「金神」の崇りを避けるために「金神除け」「金神封じ」の祈祷が山伏の大きな収入源となっていた。金光大神は「金神」を崇りの神として避けているかぎり人間に「おかげ」（恩恵）を与えてくれるはずはないと考え、この神に真に祈りを捧げることによって、神は神格を現わして人間を救済してくれると考えた。金光大神はこのような天地の神・普遍の神の「大祖神」（おやがみ）、名を「天地金乃神」（あめつちのきんのかみ）と称する神を説いた。⁽³³⁾

また「一心を立てれば我心に神が御座る」（御理解5）、「天地金乃神、一心に願、金光大神様、おかげは和賀心にあり」（御理解251）とあるように、一心に祈れば、神が心の内に現れる。神は人となり、人は神になり、すなわち「生き神」になる。「生き神とは、ここに神が生まれると云う事で、此方がおかげの受け初めである」（御理解18）。⁽³⁴⁾

「天地金乃神」を不断に祈念し、神と共に生きる生活をすれば神の靈験（おかげ）新たかなることを痛感する。「信心すれば、眼に見えるおかげより、目に見えぬおかげが多い。知ったおかげより、知らぬおかげが多いぞ。後で考えて彼もおかげであった。此もおかげであったと云う事が、了解ようになる。そうなれば真実の信者じゃ」（御理解53）。

7. 金光教の「学問」

金光教は教祖の金光大神がそうであったように、学問のない農民層や庶民層に浸透していった。「学問なければ御取次出来ず」と頻りに言う者があったので、教祖に尋ねると次のように答えた。「金光大神も無学無筆⁽³⁵⁾じゃわい。あんごう⁽³⁶⁾でも構わぬ。真さえあれば人は助かる。学問があっても、真がなければ、人は助からぬわい。『学問が身を喰ふ』と云うことがある。学問があっても難儀をして居る者がある。金光大神は無筆でも『金光大神々々々』云うて、皆、靈験を受けるわい」。⁽³⁷⁾学問がある前に誠実な真の間であることの方が重要であり、学問が生活に生かされていないことを批判し、無学でも人「おかげ」を与えることが大切であることを説く。金光教の真の信心を懐く人は真の道を行なう人である。それは実生活の中で誠を行ない、正直に生きるということである。「然れば、真正の信者たらん人は、真の道を履むと云ふ事を能く心得べし。故に教祖は『信心する人は、何事にも真心になれよ』と教諭せられたり。其の何事にも真心になれよとは万

事万行誠の心、即ち正直を外すなどの意味なり」(神誠正伝)。(38)

8. 父母の宗教と太田俊雄

母・加津が「岡山の名医はサジを投げたが、神様は見捨てることがなかった」「神さまがついていて下さらなかつたら、どうしてあんなにして助けられるもんか」と繰り返し言い、「タマよけには惜しい。銃後にあつて良き奉公をせよ、と言われたのも神さまのお声じゃ」「神さまは生きておられる」という信仰は、金光教の「生き神」信仰によるものであった。父・傳五郎が「お天道さまは見ておられる」「神さまは生きておられるからなア。人はごまかせても、神さまはごまかさねぞ」と口ぐせのように言い、「ほんとうの人間」にするために「人生のほんとうの学問」を石切り場で伝授するという即物教育による学問観は、迷信から解放された金光教の「生き神」信仰とその実践による人生観に基づいている。

太田俊雄は除隊後、死ぬ覚悟で上京して勉学に励むと同時に、柴田俊太郎から贈られた聖書を手にして牛込矢来町の福音教会でロイス・クレーマー宣教師の指導の下でキリスト教に入信し、キリスト教の教育思想を育んでいった。キリスト教に接する以前に岡山巒で藤井豁爾校長の教育実践による陽明学の「心の教育」と父母を通して刻印づけられた金光教の実践的な「生き神」信仰という二つの「野生のオリーブの木」に、柴田俊太郎とクレーマー宣教師を通して導かれたキリスト教の「真のオリーブの木」が「接ぎ木」された。それは小原国芳・羽仁もと子・河井道の全人教育・人間教育という教育実践とブッシュネルやミラーらの宗教教育思想を幹にして、「心の教育」「労作教育」(大学「ボランティア」)などに集約される敬和学園のキリスト教主義教育として展開していったのである。

金光教は神社神道から一線を画していたが金光大神の没後は教団を形成すると共に国家神道に絡め取られていく。太田俊雄の日の丸問題もこの視点から光が与えられよう。

註

- (1) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（1）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）、115-126頁。
- (2) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（2）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第9号（2011年）、1-10頁。
- (3) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（3）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第10号（2012年）、61-69頁。
- (4) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（4）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第11号（2013年）、1-9頁。
- (5) 太田俊雄『太夫浜卓話』第3巻（『敬和』第154号1982年3月「揺り籠を動かす手」）、（『敬和』第154号1982年3月「揺り籠を動かす手」）、91頁「先生の人格形成に一番影響を与えられたのは、中学時代の柴田俊太郎先生であったと思いこんでいましたが、それは間違いでした。それよりも先にお父さまやお母さまとの出会いがあって、そちらの影響の方が、もっと大きいのですね。」「子どもが最大の影響を受けるのは両親です。」
- (6) 太田俊雄『太夫浜卓話』第2巻（『敬和』第111号1978年6月「獲得するもの、与えられるもの」）、196頁。
- (7) 太田俊雄『太夫浜卓話』第1巻（『敬和』第54号「親と子と教育」1972年6月）218頁。「人間形成の最も重要な役割を演ずるのは母親であることは今さら言うまでもない」太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』『敬和学園史レポート集成』vol.19（2010）、10頁。
- (8) 「父・傳五郎は1958年6月7日、母・加津は1964年10月10日に、同じく82歳で他界した」（太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』1頁）という点から、共に誕生日が不明であるので、傳五郎は1875/6年（明治8/9年）生まれ、加津は1881/2年（明治14/5年）生まれである。
- (9) 長女・志づ（1900年生）、次女・正子（1908年生）、長男・俊雄（1911年生）、次男・勝巳（1912年生）、三女・清子（1915年生）、三男・福三（1917年生）、四男・久治郎（1920年生）、太田敬雄編・太田俊雄著『父との「新しき出会い」—太田俊雄召天十周年記念』開文社出版、1999年、ix頁「太田俊雄年表」。
- (10) 「大体親のない子を小学校を終えた年齢で「弟子入り」させて、父は彼らをきたえ、その手に職をつけて数年後に独立させて、世に送り出す、昔の徒弟制度であった。」太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』15-18頁。
- (11) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』11頁。
- (12) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』15頁。
- (13) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』6-8頁。「学校の宿題ぐらいいは忘れても、大したことはない。しかし、神さまの宿題は忘れてはなりませんぞ。よう忘れてはなりませんぞ。」『神さまの宿題・後にのこるもの』41頁。
- (14) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』9頁。
- (15) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』11-12頁。
- (16) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』9-10頁。
- (17) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』14頁。
- (18) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』50頁。
- (19) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』82頁。
- (20) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』51頁。
- (21) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』24頁。
- (22) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』25-26頁。

- (23) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』27頁。
- (24) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』28頁。
- (25) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』92-95頁。
- (26) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』54頁。
- (27) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』88頁。
- (28) 太田俊雄『神さまの宿題・後にのこるもの』43頁。
- (29) 太田敬雄氏の証言による。
- (30) 金光教については、村上重良「金光教」『日本宗教辞典』講談社学術文庫、1988年、310-316頁；村上重良「金光大神と金光教」『民衆宗教の思想』（日本思想体系第67巻）岩波書店、1971年、616-633頁；金光大神「金光大神覚」『民衆宗教の思想』312-363頁；小沢浩『生き神の思想史—日本の近代化と民衆宗教』岩波書店、1988年、参照。
- (31) 太田俊雄の育った菅生村三田の約20キロ西方にある。
- (32) 「実語教・童子教」は平安末期から明治初期まで使われていた初等教育の教訓的入門書。
- (33) 田中義能『金光教の研究』日本学術研究会1934年、1-96頁、特に1-10頁、田中義能『神道十三派の研究』下巻、第一書房、1987年、所収。
- (34) 金光大神「金光大神理解」『民衆宗教の思想』364-422頁、特に374頁；田中義能『金光教の研究』41-44頁。
- (35) 「無筆」とは「文字を知らず書けないこと」。
- (36) 「あんごう」とは「方言で話す愚か者のこと」。
- (37) 金光大神「金光大神理解」364頁。
- (38) 田中義能『金光教の研究』52-56頁。